

鷗友学園女子中学校

2010年度

入学試験問題（3次）

【国語】

時間 50 分

【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題は全部で12ページあります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、監督かんとくの先生を手をあげてよんでください。
3. 問いに字数指定がある場合には、句読点なども1字分に数えること。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

江戸時代末期、国定忠次は代官を殺したため、役人に追われて信州へと落ちのびようとしていた。十一人の子分達はみな忠次についていきたいと思い、どうやってお供の者を決めるか話し合っていた。

「おめえたちのように、そうざわざわさわいでいちや、いつがきたって、はてしがありやしねえ。① おれひとりを手ばなすのが不安心だというのなら、おめえたちのあいだで入れ札をしてみちや、どうだい。札かずの多い者から、三人だけつれて行こうじゃねえか。こりやいちばんうらみつこがなくって、いいだろうぜ。」

忠次のことばが終わるか終わらないかに、

「そいつあ思いつきだ。」

子分のうちでいちばん人望のある喜蔵が賛成した。

「そいつあ趣向だ。」

大間々の浅太郎もすぐ賛成した。

心のうちで、くじ引きを望んでいる者も数人あった。が、忠次の、うらみつこのないように、しかも役にたつ子分を、選ぶというはらがわかると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜蔵が矢立を持っていた。忠次がふところから、はな紙の半紙を取りだした。それを喜蔵が受けとると、長わきざしをぬいて、てぎわよくそれを小さく切りわけた。そうして、ひときれずつみんなにくばった。

さつきからの経路を、いちばんいやな心で見ているのは稲荷の九郎助だった。かれは年輩からいっても忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかった。が、忠次からも、子分からも、そのようにはあつかわれていなかった。去年、大前田の一家とちよつとした出入りのあつたとき、かれはけんか場から、不覚にも大前田の身内の者に、引つかつがれた。それ以来、かれは多年つちかっていた自分の声望がめつきり落ちたのを知った。自分からいえば、はるかに後輩の浅太郎や喜蔵にだんだんしのがれてきたことを、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟どうように賭場から賭場を、いっしょに漂浪して歩いた

忠次までが、いつとなく、自分を軽んじていることを知った。みなは表面こそ「あにい！ あにい！」とたてているものの、心のうちでは、自分を重んじていないことが、ありありと感ぜられた。

入れ札という声を聞いたとき、九郎助は悪いことになったなあと思った。^② いままで、表面だけはともかくも保ってきた自分の位置が、露骨にくずされるのだと思うと、かれはいやな気がした。十一人いる子分の中で自分に入れてくれそうな人間を考えてみた。が、それは弥助のほかに思ひあたらなかった。弥助も九郎助とどうように、古い顔であつて、後輩の浅太郎や喜蔵など、ぐんぐん頭をもたげてくるのを、常からこころよからず思っているから、こうしたばあいには、きつと自分に入れてくれるだろうと思つた。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中にはいることは考えられなかった。浅太郎には四枚はいるだろうと思つた。喜蔵に三枚はいるとして、十一枚のうち、あとへ四枚のこる。そのうち、自分の一枚をのけると三枚のこる。もし、そのうち、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中にくわはることはできるかもしれないと思つた。が、弥助のほかに、自分に入れてくれそうな人は、どう考えてもあてがなかつた。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若いときには、かなりせわをやってやつたおぼえがある。が、それは六―七年も前のことで、今では「浅あにい、浅あにい。」と、浅にばかりくつついている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚のほかに、いま一枚を得るあては、どうにもつかかなかつた。子分の中で年がしらでもあり、いちばん兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しもないことがまざまざとあらわれることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。ふゆかいなさびしい感じにたえられなくなつてきた。

一本しかない矢立の筆は、つぎからつぎへとまわつてきた。

「おい！ あにい！ 筆をやらあ。」

ぼんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横にいた弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、にやりとわらつた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。「おめえを入れたぜ。」というような、意味を持った微笑であるように九郎助は思つた。そう思うと、九郎助はあとのもう一枚が、どうしてもほしくなつた。あとの一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるように思われた。忠次について行つたところで、自分の身にいい芽が出ようとは思われなかつたが、入れ札にもれて、年がいもなく置き捨てにされることが、どうしてもたまらなかつた。浅太郎や喜蔵の人望が、

自分の上にあることが、まざまざとわかることが、どうしてもたまらなかった。

かれは、筆を持って、ぼんやり考えた。

「おい！ あにい！ 早くまわしてくんな！」

横にすわっている浅太郎が、かれに言った。あにい！ と言いなながらも、語調だけは、目下を叱ししているような口調だった。

九郎助は、まいどのことながらむつとした。とたんに、相手に対するはげしい競争心が——嫉妬じとがむらむらとかれの心にうずまいた。

筆を持っている手が、少しぶるぶるふるえた。かれは、紙をからだでおおいかくすようにしながら、かなで「くろすけ」と書いた。

書いてしまうと、かれはその小さい紙きれをくるくるとまるめて、まんなかにおいてある、からになったわりごのふたの中に入れた。が、入れた瞬間しゆんに、にがい悔悟かいごが胸の中注6にすぐ起こった。

「ばくちは打つても、ひきようなことはするな。男らしくねえことはするな。」

口ぐせのように、どなる忠次の声が、耳のそばで、がながん鳴りひびくような気がした。かれはみなが、自分の顔を、じろじろ見ているような気がして、どうしても顔をあげることができなかつた。

吉井よしの伝助でんすけは、無筆だったので、かれはなかよしの才助に、小声で耳うちしながら、代筆をたのんだ。

みなが、札を入れてしまうと、忠次が、

「喜蔵！ おめえ読みあげてみねえ！」

と言った。みなは、緊張きんのために、目をかがやかした。過半数のものはあきらめていたが、それでもめいめい、うぬぼれは持っていた。注7つぼざらを見つめるような目つきで、喜蔵の手もとをにらんでいた。

「あさ、ああ浅太郎のことだな、浅太郎一枚！」

そうさけんで喜蔵は、一枚、札をべつにおいた。

「浅太郎二枚！」

かれはつづいてそうさけんだ。

また、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二—三年忠次の信任を得て、かげの形につきしたがうように、忠次がかれを身

辺からはなさなかつたことは、子分の者がみなよく知っていた。浅太郎の声がつづく、忠次の浅黒い顔に、にっと微笑が浮かんだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、うれしそうに、にこりとわらいながらさげんで、

「うそじゃねえぞ！」

と、つけたしながら、その紙を右の手で高くあげてさし示した。

「そのつぎがまた、喜蔵だ！」

喜蔵はとくいげに、また紙ふだを高くさしあげた。

「嘉助かすけが一枚！」

第三の名まえが出た。忠次は、心の中で、ひそかに選んでいる三人が、入れ札の表にあらわれてくるのが、うれしかった。子分たちが自分の心もちを、察していてくれるのがうれしかった。

「なんだ！ くらすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高くさげんだ。九郎助は、顔から火が出るように思った。生まれてはじめて感ずるような羞恥しゆうちと、不安と、悔悟とで、胸のうちがかきむしられるようだ。自分の手跡せきを、喜蔵が見おぼえては、いはしないかと思うと、九郎助は立つてもすわつてもいられないような気もちだった。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわっていないかった。

「浅が三枚だ！ そのつぎは、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声にさげびつづけた。札がつぎつぎに読みあげられて、喜蔵の手にたった一枚のこつたとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だった。嘉助と九郎助とが、各自一枚ずつだった。

九郎助は、心のうちでけんめいに弥助の札が出るのを待っていた。弥助の札が出ないことはないと思っていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中にはいるのだと思っていた。

が、さいごの札は、かれのせつない期待をうらぎって、嘉助に投ぜられた札だった。

「さあ！ みんな聞いてくれ！ 浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思うやつは、自分でしらべて見るといいや。」

九郎助の顔は、すごいほどに青かった。

「おらあ、秩父ちちぶのほうへ落ちようかな。」

九郎助はひとりごとのように言った。かれはなかまのだれとも顔を合あわしているのがいやだった。秩父に遠縁えんの者がいるのをさいわいに、そこで百姓しやうにでもなつてしまいたかった。

かれは、草津へ行った連中とは、反対に榛名はるなの西南のふもとをめざして、ぐんぐん山をおりかけた。かれが、二―三町も来たときだった。うしろから声をかけるものがあつた。

「おいあにい！ 稲荷いなりのあにい！」

かれは、立ちどまつてふり返つた。見ると、弥助が、息を切らしながら、追いかけて来たのであつた。かれは弥助の顔を見たときに、はげしい憎悪ぞうおが、胸のうちにわいた。たいせつなばあいに自分をうらぎつていながら、まだ身のふりかたをでも相談しようとするらしい相手の、ずうずうしい態度を見ると、かれはその得手勝手が、たたき切つてやりたいほど、しゃくにさわつた。

「おらあ、よつぽど草津くさづから越後えちごへ出ようと思つたが、よく考えてみると、熊谷くまがやにおじがいるのだ。少しは、熊谷は危険かもしれないねえが、故郷こきやうへかえる足あしだまりにはもつてこいだ。それでおれも武州ぶしうのほうへ出るから、途中ちゆうちゆうまでつきあつてくれねえか。」

九郎助は、へんじをすることさえいやだった。だまつてすた、こら歩いていた。

弥助は、九郎助がきげんが悪いのを知ると、そばへよつた。

「おらあ、きょうの入れ札には、最初はなからいやだった。親分も親分だ！ がきのときからいっしょに育つたおめえをつれて行くと言わねえ法はねえ。浅や喜蔵は、いくら腕うでつぶしや、才覚があつても、いわば、おめえにくらべればほんの小僧こぞうつ子だ。たとい、入れ札にするにしたらところが、やろうたち、おめえを入れねえということはありやしねえ。十一人の中でおめえの名を書いたのは、この弥助ひとりだと思つと、おらあいつらの心根が、まったくわからねえや。」

だまつて聞いた九郎助は、火のようなものが、からだの周囲に、ひらめいたような気がした。

「このやろう！」

そう思いながら、わきざしのつかを、左の手で、ぐつとにぎりしめた。もう、ひとこと言つてみる、ぬき打ちに切つてやろうと思つた。

が、九郎助が火のように、おこつていようとは夢にも知らない弥助は、へいきな顔をしてよりそつて歩いてた。

つかをにぎりしめている九郎助の手が、だんだんゆるんできた。考えてみると、^④弥助のうそをとがめるのには、自分のはずかしさを打ちあけねばならない。

そのうえ、自分に大うそをついている弥助でさえ、自分があんないやしいことをしたのだとは、夢にも思っていないなければこそ、こんなしらじらしいそをつくのだと思いと、九郎助は自分で自分がなさけなくなってきた。口さきだけのうそをへいきで言う弥助でさえが考えつかないほど、自分はいやしいのだと思いと、頭の上にかがやいている晩春のお天道さまが、いちじに暗くなるようなあじけなさを味わった。

山の多い上州の空は、いっぱいに晴れていた。峰から峰へ渡る幾百ばという小鳥の群れが、黄いろいつばさをひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通っている。行く手には榛名が、空をくぎって、青々とそびえていた。

〔菊池寛『入れ札』〕

(注1) 趣向……おもしろい考え。

(注2) 矢立……筆を入れる筒の先にすみつぼをつけて携帯する筆記用具。

(注3) 出入り……もめごと、けんか。

(注4) 賭場……賭け事をする場所。

(注5) 栄辱……名誉と恥。

(注6) 悔悟……それまでの行動や態度を悪かったとさとり、後かいすること。

(注7) つばざら……賭け事をする際に、サイコロを入れてふせるのに用いる器。

(注8) 足だまり……しばらく滞在するところ。

問一

——線部①「おれひとりを手ばなすのが不安心だというのなら、おめえたちのあいだで入れ札をしてみちゃ、どうだい」とありますが、どのような考えから、忠次はこのように提案したのですか。本文中から三十〜三十五字以内で探し、初めと終わりの五字をぬき出しなさい。

問二

——線部②「いままで、表面だけはともかくも保ってきた自分の位置が、露骨にくずされる」とはどのようなことですか、百字以内で説明しなさい。

問三

——線部③「そう言いながら、九郎助は立ちあがってちらばっている紙きれを取り集めると、めちやめちやに引きちぎって投げすてた」とありますが、九郎助のこのような行動には、(ア)表面上の理由と(イ)内面の理由があると考えられます。それぞれ説明しなさい。

問四

——線部④「弥助のうそをとがめるのには、自分のはずかしさを打ちあけねばならない」とはどのようなことですか。「弥助のうそ」と「自分のはずかしさ」を明らかにして説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヌチグスイ、食べものは命の薬。クスイムン、薬になる食べもの。沖繩^①には、そういった食養生^{しよくじやうじやう}の考え方を表す言葉があるという。その沖繩は、長いこと、世界で最も長寿^{じゆ}の日本の中で平均寿命の最高記録を保持し続けてきた。事実、女性はこの二十年以上ずっとトップの座を保持し、人口十万人あたりの百歳以上の人数が全国平均の三倍近くにもなる。

ところが、男性の寿命はというと、事情は一変する。この数年、じわじわ下がってきて、今や二十六位にまで落ちこんでしまった。

身体によい食事というのは何だろう。改めてそんなことを考えるために、琉球^{りゅうきゆう}大学の名譽教授^{なよ}で長寿食の權威^い、尚弘子^{しやうひろこ}さんに会いにやってきた。尚の姓^{せい}は、明治政府によって十九世紀末に島を追われた琉球王家の一族のものである。肺炎^{えん}で先立った尚さんの夫は、一族の末裔^{えい}の一人だった。

「知ってますねえ、島のお年寄り。これを食べると身体が温まるとか、身体から熱を発散するのだとか、まるで中国の古い医学書に書いてあるようなことを、よく知っています。」

栄養学の教鞭^{べん}をとっていた尚さんは、現役^{げんぎやく}の頃、島のお年寄りが普段、食について口にすることを、片っ端^{ぺん}から科学的に実証しようとした。

「今の首里城がキャンパスだった頃からです。それは、ほとんど手作りのようなお粗末^そな実験室でね。にがうりでも、もずくでも、黒糖でも、三十五年の間にマウスを使った実験で確かめてきましたからね。」

そして、改めて、沖繩独特の食養生に気づかされた。

「たとえば、ターイユシンジ、これは鮓汁^{かまじり}のことですが、そのことをお年寄りはハツサングスイ、発散する薬、つまり解熱^{げねつ}剤^{ざい}と呼ぶ。そして、今も熱が出ると食べさせる。また、クーイユシンジは鯉汁^{こい}ですが、こちらは根気をつける薬、クンチグスイと呼んで、疲^{つか}れた時に作る。鯉は鮓より少し脂^{あぶら}が多いですし、理^{こと}に適^{かな}つてますよね。これらにニガナやヨモギのような野草を組み合わせるんです。細かく成分を確かめると、ますます納得^{なとく}が行く。これは沖繩の特徴^{ちゆう}ですが、シンジグスイ、煎じ薬^{せんじやく}といっても、一種類を煎じるのではなく、身近な材料を組み合わせ、これを日常的に食べるんです。」

いか墨汁すみのことは、サググスイ、下げ薬と言うが、これは、血を下げるの意味で、のぼせなどに効く。そして、この沖繩のいか墨スープは、カトリックの宣教師がもたらした料理といわれ、長崎經由ながさきの東西融合ゆうごうの食文化だと言う。

(中略)

尚さんも、その昔、沖繩本島の南の糸満の農家を訪れた時、豚の血に、片栗粉と塩を入れて、加熱して保存する技術が残っているのを見つけた。命をとことん無駄にしない態度に感動し、思わずお年寄りに聞いたという。

「尻尾しっぽ以外は、全部食べたのですね。」

すると、相手のおばあさんが、これを一喝かつした。

「とんでもない、尻尾はとてもおいしんだよ。鳴き声以外は、みんな食べられる。」

「島の年寄りには、足腰こしが弱つたら、足デビチーを食べると言う。腎臓じんが弱つたら豚の腎臓のお汁。これは、中国の『補中益氣』に通じる発想ですが、確かに豚の足は、老化とともに不足する上質のコラーゲンのかたまりです。ネズミで実験したら、足の部分が一番、血しようや肝臓かんの中性脂肪しぼうを下げる効果が高かった。確かにお年寄りには良さそう。けれど、だからといって、豚肉は身体に良いと、そう単純なものじゃないんです。」

老化防止の豚肉料理とは、沖繩の何も無駄にしない知恵えが生んだ足や耳や内臓の料理だった。尚さんは、むしろ脂の多い三枚肉を使う時、どんな料理でも、まず水で煮て脂をよく抜いて使うという沖繩の技に注目すべきだといった。それに豚肉が大切にされたのは、島の主食が芋いもだった頃の話だ。沖繩の豚とさつま芋は、切っても切れない関係にある。水持ちの悪い石灰質かいの島では穀物がうまく育たない。そこで十七世紀、中国から導入されたさつま芋が根づいた時点から、芋は豚の餌えきともなり、豚を飼う習慣も島に深く根づいた。

「明治の頃まで島の九割が芋食です。エネルギー源もあまりなかった時代には豚の脂は貴重、かつ身体によいものだったと思います。けれど、今のようにはバターもサラダ油もある時代には、さすがに脂ですから、毎日食べるのはどうでしょうかね。」

沖繩で、男性の平均寿命の順位がすっかり落ち込んでしまったことが、それを証明しているという。ちなみに、一位から二十六位にころげ落ちたという現象は、二六ショックと呼ばれ、栄養学の専門家たちを動揺どうごうさせた。高血圧、糖尿病や肥満の割合がぐっと高くなった。琉球大学医学部の内分泌代謝びつ内科の高須信行たかすさんは、この原因を、沖繩の食生活の変化に見ている。その一九九九年の調査によれば、小学校入学時までにはファストフードを食べたことがあるという人の割合が、県外では十一パーセン

トであるのに対し、沖縄では何と五十七パーセントだったという。米軍基地のある沖縄では、早くからファストフード化が進んでいた。つまり、^③二六ショックは、日本人のこれからを予見している、というのである。

(島村菜津『スローフードな日本!』)

(注) 補中益気……体の働きをよくする、中国の漢方での治療^{りょう}方法。

問一 —— 線部①「沖縄には、そういった食養生の考え方を表す言葉があるという」とありますが、沖縄の人々は食べものをどのようなものとしてとらえているのですか。本文中の(中略)より前の部分から、具体例を一つ取り上げて説明しなさい。

問二 —— 線部②「豚肉は身体に良いと、そう単純なものじゃないんです」とありますが、なぜ豚肉は身体に良いと言えないのですか。昔の状況ようと今の状況を比べて、その理由を説明しなさい。

問三 —— 線部③「二六ショックは、日本人のこれからを予見している」とありますが、高須信行さん(10ページ)はどのようなことが起きると予見していますか。その原因もふくめて、八十字以内で説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) ある言葉をコウギに理解する。
- (2) トロウを感じながらも言葉をくり返す。
- (3) ダンチヨウの思いで別れる。
- (4) キヨクチ的な大雨にみまわれる。
- (5) 人それぞれにアイシヨウカがある。

